2025 年 12 月 30 日第 2 開発版
2025 年 12 月 24 日第 1 開発版

2026 年次

電気通信大学不公認

『両面左綴形日程表』

学籍番号

名前

所属研究室 (B4 以降必須)

2025 年 12 月　師走

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31	*1 //元日	*2	*3

1月　睦月

日	月	火	水	木	金	土
*28	*29	*30	*31	1 元日	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12 成人の日	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

2月　如月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11 建国記念日	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23 天皇誕生日	24	25	26	27	28
*1	*2	*3	*4	*5	*6	*7

3月　弥生

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20 春分の日	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

4月　卯月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29 昭和の日	30	*1	*2

5月　皐月

日	月	火	水	木	金	土
*26	*27	*28	*29 //昭和の日	*30	1	2
3 憲法記念日	4 みどりの日	5 こどもの日	6 振替休日	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24 LET 31	25	26	27	28	29	30

6月　水無月

日	月	火	水	木	金	土
:= 31	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

7月　文月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20 海の日	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

8月　葉月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11 山の日	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
LET 30	LET 31					

9月　長月

日	月	火	水	木	金	土
:= 30	:= 31	1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21 敬老の日	22 国民の休日	23 秋分の日	24	25	26
27	28	29	30			

10月　神無月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12 スポーツの日	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

11月　霜月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3 文化の日	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23 勤労感謝の日	24	25	26	27	28
29	30					

12月　師走

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

新たな方式による保存を可能とした
短編小説 『マフラーの半分のこと』

この季節になると思い出すんだ。押し入れから掘り出されては編まれて、結局はママのものになった手編みのマフラーのことを。

マフラーを編み始めたのは、まだ中学生のとき。年下のあのこにバレンタインデーのプレゼントをしたくって、ちょうど 12 月のこのくらいの時期に編み始めたのでした。手編みのマフラーをプレゼントなんて、ちょっとお姉さんっぽくて憧れてた、そんなときのこと。

まず、毛糸と編み棒と、それから編み方の本を買ったんだったかな。でも全部ママが教えてくれたから、毛糸以外は買っただけお金の無駄でした。最初から全部ママに聞けばよかったのにって、今でもたまに思い出しては後悔してるんだ。ママは私の無駄遣いを鼻で笑いながらちょっと責めはしたんだけど、編み方は丁寧に教えてくれたんだった。それに、私が買ったのより一回り太い編み棒を、私専用にくれたし。

ごめんなさい、あのとき実はママに嘘を吐きました。マフラーはママにプレゼントするって言ったから。だって、そうじゃないとおかしい気がしたんだもの。それに、そう言ったらママは喜んでくれるって知ってたから。まさか、あのこにあげたいなんてママに言えるわけないじゃん。ね。ママは私の嘘を許してくれるって信じてるけどね。

さて、では話をマフラーに戻します。うちは女子校だったせいか、他のクラスメイトも授業中にこっそりマフラーを編んでいました。といっても共学とか男子校でもそんな感じなのかも。そういえば、あのこは男子校だったから聞いてみればよかったな。

教室では授業中にマフラーを編みながら、みんな揃って「自分用よ」って言ってた。私も「自分用だよ」って言ってたけど、心の中ではあのこにプレゼントできることを特別に思ってました。今思えば、みんなそれぞれの特別な人がいて、みんなそれぞれの特別な思いに浸っていたのかもしれないけど。とにかく、私とクラスメイトは競うように、何事もないように、編み物をしていました。一人だけセーターを編んでた手芸部の子がいて、その子はすごかったな。それでもその子以外だとね、私はクラスの中ではきっちり編めていた方だったんだ。

ママは私の途中作を見て「硬くて雑巾みたい」ってやっぱり笑っていたけど。ママはそうなることも見越して、ちゃんと太めの編み棒を用意していてくれただろうに、ちゃんと柔らかく編めなくて本当に申し訳なくって。でも本当に、クラスの中では上手なほうだったんだよ。冬休みが来ても、あのこにはマフラーを編んでいることは内緒にしてたな。バレンタインデーのプレゼントにしたかったから。

マフラーは隠れて編んでいたけど、あのこも私も冬休みの宿題が多くって多くって、ふたりとも大変で、だからこそ頑張れてたこともあったはずなんだ。ふたりとも定期券で来られる、ふたりの家のちょうど真ん中の駅の喫茶店で、毎日のように一緒に宿題を解いてたのなんていい想い出。私の方が学年が上だから、あのこにたくさん勉強を教えてあげられたけど、私は数学だけは苦手だったな。意外と一番楽しかったのは読書感想文の課題！ふたりとも読書感想文は大嫌いだったけど、ふたりで本と作文を交換したの。そうしたら、私の中にあのこが宿っているような気持ちになって、あんまり興味の沸かない推薦図書さえ愛おしくなっちゃったっけ。これは自慢になっちゃうけど、私の書いた作文は、後日あのこのクラスで表彰されたんだって。あのこは私のお陰だって言ってたけど、私の書いた作文はあのこ自身の作品だと思うんだ。だって、あれは私の中のあのこが書いた作文だから。

全てはあのこのために、って。

あの日、あのこは私の胸の真ん中を指で突きながら、お礼の言葉を何度もかけてくれて。それから。あの日はじめてしたキスは紅茶の味がして。だから、今でも私にとって紅茶は記念日の味なんだ。渋い赤褐色の紅茶にレモンを入れたときみたく、海浜公園の水平線に輪切りの太陽を染み込ませていくような夕暮れの味、みたく？そんな夢のような瞬間？なーんて言っておいて、私もいまだにあの時のことはよく分かんないんだけどさ。けど、そんな夢みたいな瞬間を垣間見たせいか、夢と現実の境い目のようなものもくっきりと見えてくるようになっちゃって。あのこは本当に私のことが好きなのか？私、本当は悪いことしてるんじゃないか？そもそも私の気持ちは迷惑だったんじゃないか？ってふうに。考えれば考えるほど私は私の言葉を失ってしまって。それを埋めるみたく、あのこは自分の自慢話を多くするようになってきて。それでもあのこのことは本当に手放したくなかった。はずなのに。

ある日、堰き止めていた小さな言葉が口から出てしまったら、いつも温和なあのこが急に怒り出してしまったの。あのときは本当に怖くて驚いたんだ。でも、あのこを怒らせてしまうなんて、きっとあのときの私がどうかしていたんだと思ってるんだ。そう、あのときは私がもっと我慢すればよかったはずなの。だって、私と、私の言葉が求める全てが徐々に膨らんじゃったせいで、私たちの関係はバレンタインデーまでもたなくなっちゃったのだから。私が年上のお姉さんだったはずなのに、おかしな話だよね。それでね、私はあの冬の季節はバレンタインデーを前にして、編み物もぱったりやめちゃったんだ。

でもやっぱり、次の 12 月が来て思い出したのは、あのこと過ごせた日々だったんだ。だから、あのこと疎遠になってからも、マフラーだけはせめて完成させたいって願ったの。ただあのこの虚像を追いかける手は、マフラーを編み終えるにはあまりに遅くて稚拙でした。クラスでもまた同じように「自分用だよ」と言って編みつつも、誰のために編んでいるのかすら分からなくなっちゃって。みんなにはみんなの特別なダレカがいたんだろうな。私にも、前の冬にはいたはずの特別なダレカ。

そんなある日の朝、私のマフラーの半分は美しく、それでいて唐突に完成されていました。すごく丁寧に折り畳まれて。半分は私が編んだって分かるけど、もう半分はママが徹夜で編んでくれたみたい。

私は半分こもった私の気持ちにお別れを告げたくて、マフラーをママにあげることにしました。ママは「簡単だったわよ」とだけ言って嬉しそうに私のマフラーを受け取ってくれました。

私は、私の思い出の中であのこと繋がっていられることが嬉しいんだ。その思い出の中ではマフラーなんてお飾りにすぎないし。そもそもあのこはマフラーのこと知らないんだし。

全てはあのこのためにって、気持ちだけ。（終）